

## 参考資料 ① アライグマ・ハクビシンに関する主な人獣共通感染症

- 1 接触感染する疾病  
疥癬、皮膚糸状菌症、ツツガムシ病、レプトスピラ症、アライグマ糞線虫症等
- 2 経口感染する疾病  
サルモネラ菌食中毒、カンピロバクター食中毒、エルシニア食中毒、トキソプラズマ症、アライグマ回虫による幼虫移行症、E型肝炎等
- 3 ペットへの感染の恐れがある疾病  
ジステンパー、パルボウイルス感染症、アデノウイルス感染症等
- 4 今後発生を注意すべき疾病  
狂犬病、エキノコックス症、重症熱性血小板減少症候群（SFTS）、重症急性呼吸器症候群（SARS）等

## 1 接触感染する疾病

## ① 疥癬

【病原体】 ヒゼンダニ

【感染経路】 動物間では動物同士の直接接触、感染動物のケージなどから感染する。動物から人へは感染した動物に触れることで感染する。人の間でも、肌から肌に感染したり、寝具を通じて感染する。

【動物の症状】 痂皮の形成が特徴的で、皮膚の肥厚や脱毛なども見られる。強いかゆみが起こるため、病変部を掻くことによる二次感染も生じやすい。

【人の症状】 全身に寄生し、寄生部位に丘疹や小水疱がみとめられる。病態が進行すると、角質が増殖し、病変部が白色になる。激しいかゆみが特徴で、皮膚を掻くことで外傷が生じ、細菌などの二次感染を受けることもある。

【発生状況】 世界的に発生が認められ、日本においては、以前は多発していたが、近年は減少している。動物のヒゼンダニは人への感受性が必ずしも高いとはいえないが、免疫機能が低下している場合には発症しやすくなる。

## ② 皮膚糸状菌症

【病原体】 真菌類

【感染経路】 感染した動物との接触により、人に感染する。また、土壌や家庭のほこりに生息していたものが動物や人に感染する。人から人にも感染する。

【動物の症状】 全く症状を示さず付着している場合と、皮膚に病変が見られる場合とがある。病変は体の各所に見られ、いったん病変ができると急速に広がる。フケ、脱毛、発疹、かゆみ、びらん及び出血が見られる。重篤になると化膿する。

【人の症状】 症状から、頭部白癬、体部白癬、ケルスス禿瘡などに分類される。

【発生状況】 原因菌は輸入ペットやエキゾチックペットによってもたらされたものが多いと考えられている。水虫等を含めた白癬といわれる病気は、国内で1000万人以上が罹患していると言われている。

## 2 経口感染する疾病

### ① サルモネラ菌食中毒

【病原体】 細菌（サルモネラ・エリテリティディ）

【感染経路】 保菌動物の糞便、汚染飼料、水などの摂取によって感染する。人は本菌に汚染された食品の摂取によって感染する。

【動物の症状】 イヌやネコも多くは不顕性感染だが、胃腸炎や敗血症を起こすことがある。この場合、発熱や食欲不振、嘔吐、腹痛、下痢の症状があらわれる。

【人の症状】 最も多いのは胃腸炎で、6～72時間の潜伏の後、突然、腹痛、嘔吐で発症。下痢や発熱が見られることもある。

【発生状況】 2003～2005年の間で年間4～6千人前後の患者数が報告されている。ミシシッピアカミミガメやイグアナが感染源であると疑われた症例も報告されている。

### ② カンピロバクター食中毒

【病原体】 細菌（カンピロバクター・ジェジュニ、カンピロバクター・コリ）

【感染経路】 保菌動物の糞便に汚された水・餌などから感染する。人への感染は、本菌に汚染された水や食品からの感染や、保菌した動物との接触によって感染する。

【動物の症状】 イヌ・ネコともに不顕性感染。幼若の個体は下痢を起こすこともある。慢性感染に移行すると間欠的に下痢が見られ、体重が減少する。

【人の症状】 潜伏期は2～6日。全身の倦怠感と共に、頭痛、腹痛、発熱があり、2～3日遅れて腹痛、嘔吐、下痢が見られる。

【発生状況】 下痢症患者の20～40%からカンピロバクターが検出されているが、原因食品が特定されにくい。下痢をしているイヌとの接触から感染することも多いようである。

### ③ トキソプラズマ症

【病原体】 寄生虫（トキソプラズマ・ゴンディ）

【感染経路】 トキソプラズマ原虫に感染した家畜を食べたり、動物から排出されたオーシストを経口摂取したときに感染する。

【動物の症状】 成長したイヌやネコが感染しても、ほとんどは不顕性感染。子イヌや子ネコでは、発熱、呼吸困難、嘔吐などの複雑な症状があらわれ、重症化すると死亡することもある。

【人の症状】 オーシストとシストの経口感染によるもので、感染後に生産された増殖型が増殖を繰り返す段階で、リンパ節炎、目の網脈絡膜炎を発症する。増殖の過程で免疫応答が起き、虫体の増殖と細胞への感染が阻止されるため、多くは不顕性感染となる。

【発生状況】 日本ではネコの約5%が感染歴を有し（1994～1999年の調査）、0～1%がオーシストを排出しているとされる（1970～1990年の調査）。

### ④ アライグマ回虫による幼虫移行症

【病原体】 アライグマ回虫

【感染経路】 アライグマの糞に含まれている可能性があるアライグマ回虫卵が唯一の感染源であるので、アライグマの糞で汚染された土壌などを口に入れるのを避ける。

【人の症状】 <神経幼虫移行症> 好酸球性髄膜脳炎として発症する。一命を取りとめた症例でも、発育障害や神経系の後遺症が認められる。<眼幼虫移行症> 成人を中心に一側性の網膜炎として発症する。視力障害が残り、失命することもある。アライグマ回虫による幼虫移行症は、イヌ回虫やネコ回虫に起因するヒトの幼虫移行症に較べて重篤な場合が多い。

【発生状況】 日本では、野生のアライグマではアライグマ回虫の寄生例は確認されていないが、動物園の飼育個体では確認されたことがある。

### 3 今後発生を注意すべき疾病

#### ① 狂犬病

【病原体】 狂犬病ウイルス

【感染経路】 感染した動物に噛まれたり引っ掻かれてできた傷口から感染する。

【動物の症状】 感染した動物は 1 か月ほどの潜伏期の後、目的もなく動き回ったり、吠えたりする前駆症状が現れ、性格の変化がみられる。次いで興奮期に入り、食事もとらなくなる。咽頭部の痙攣や麻痺がおこると水分摂取できなくなり、唾液も飲み込めないため涎を流し続ける。やがて痙攣発作が起こり、呼吸停止して死に至る。

【人の症状】 通常 1～3 か月の潜伏期間後発症する。初期は風邪に似た症状で、噛まれた部位に知覚異常が見られる。その後、不安感、恐水症、興奮、錯乱などの神経症状が現れ、数日後に呼吸麻痺で死に至る。

【発生状況】 狂犬病は、日本、台湾、ノルウェー、スウェーデン等一部の国を除く世界中で発生しており、年間 5 万 5 千人もの人が亡くなっている (WHO、2004 年)。アライグマ、イヌ、ネコ、キツネ、マンガース、コウモリ等から感染した例がある。日本国内では 1957 年以降発症例はないが、海外で狂犬病に感染したイヌに咬まれ帰国後発症した輸入感染症例がある。狂犬病の流行には、イヌを主な感染源とする「都市型」流行と野生動物を主な感染源とする「森林型」流行の 2 タイプがあり、日本における過去の発生は都市型流行であった。ヨーロッパと北米の狂犬病は森林型流行であり、北米では発生動物の中でアライグマが最も高い割合を占めている。

#### ② エキノコックス症

【病原体】 寄生虫 (多包条虫)

【感染経路】 糞便と一緒に排出され、手や食品についた虫卵を口に入れたり、虫卵で汚染された沢水等を飲むことにより感染する。

【動物の症状】 終宿主 (キタキツネ・イヌ) に成虫が多数寄生すると下痢などを起こすが、少数寄生では無症状である。

【人の症状】 虫卵が口から入ることで感染し、虫卵は腸の中で孵化して幼虫になり、その後肝臓に寄生して増殖する。感染後、数年から数十年かかって自覚症状が現れる。初期には上腹部の不快感・膨張感、さらに進行すると肝機能障害が出る。

【発生状況】 北海道では 1937 年に礼文島において人への感染が確認されて以来、2002 年まで人の多包虫症例は 434 例あり、本州、九州等においても 870 例以上が報告されている (多くは北海道で感染したと考えられている)。

#### →参考文献

「人と動物の共通感染症に関するガイドライン」(環境省自然環境局)

[https://www.env.go.jp/nature/dobutsu/aigo/2\\_data/pamph/infection/guideline.pdf](https://www.env.go.jp/nature/dobutsu/aigo/2_data/pamph/infection/guideline.pdf)

「感染症のはなし」(国立感染症研究所)

<http://idsc.nih.gov.jp/idwr/kansen/>

「人と動物との共通感染症」(東京都福祉保健局)

[http://www.fukushihoken.metro.tokyo.jp/douso/kansen/kan\\_list/index.html](http://www.fukushihoken.metro.tokyo.jp/douso/kansen/kan_list/index.html)